



## 答えのない〇〇

学校訪問研修会が終わりました。お疲れ様でした。

教育事務所長からは「生徒が落ち着いた雰囲気ですべてに取り組んでいる」と。

市センター長からは「対話を仕掛ける様々な工夫があつて素晴らしい」と。

教育長からは「生徒が落ち着いていて元気だから、先生方も元気なのでは？」と。

主任指導主事からは「先生方が部会で活発に話し合っていて、いい雰囲気だった」と。

4月から「対話」を一つのキーワードとして取り組んできた成果、そして研修会に向けて準備してきた成果が表れていた授業だったと思います。

また、校舎内外の環境整備、研究授業以外の教室の見回り等もありがとうございました。

今年度も残り半年。学んだことを生かして、さらに授業力等を向上していきましょう。

さて、今回の研修会では、対話の場面において ICT 機器の活用よりホワイトボード等の活用が多くみられたと指導主事からも指摘があつた。

どちらが正解ということはない。（が、ICT 機器が使えないのはNG。積極的活用を推奨します）

一般企業においても、コロナ禍でリモート中心の仕事としたが、現在は出社して対面での業務を増やしている企業もあるという。

オンラインでできること、対面だからこそ効果が期待できること、仕事によって違うのだろう。

授業における ICT 機器の活用も、ホワイトボードの活用も、どちらも手段の一つ。

どちらの方が適切かを見極め、どちらも活用できる力をつけさせてやりたい。

大切なのは、目的が何なのか見失わないこと。

中教審答申「令和の日本型教育の構築を目指して」（令和3年4月）より。

「予測困難な時代」であり、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われている。

目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の物が

協働的に議論し、納得解を生み出すことなどの資質・能力が一層強く求められている。

答えのない問いに立ち向かう力、課題を見だし納得解を生み出す力の育成が目的と考える。

図書室にある「答えのないゲームを楽しむ思考技術」にも、次のような言葉が。

義務教育、大学受験、資格試験、これらは全て「答えのあるゲーム」

私たちは、頭の先からつま先まで「答えのあるゲーム」にどっぷり浸かっている。

しかし、新型コロナが社会を襲い、私たちの生活は変わってしまった。

今までの「答え」が通用しない時代に突入している。 と。

読みながら、自分は「答えのないゲームの楽しみ方」という「答え」を探しているのではないかと、答えにどっぷり浸かってきた頭が考え出した。やっぱり「答え」がほしいようである。

ただ、本書には、考える技術について面白く解説してあり、納得することが多い。

人生や仕事における答えのない時代を、ゲームと捉える柔軟性とユーモアがいいなあと思う。

生徒も私たちも「答えのない時代」を生き、「答えのない問い」に立ち向かわなければならない。

どうすればよいのか。私たちも協働的に議論し、納得解を生み出していきましょう。

決して妥協案にならないよう注意しながら。